



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人文・社会科学系大学院生への研究環境向上に資する経済支援
Author(s)	飯塚, 理恵; 澤田, 真理子; 森岡, 和子 他
Description	RA協議会第11回年次大会 : グローバル連携とローカル貢献 : URAの戦略的アプローチ. 2025年10月21日(火) - 10月22日(水). 主催 : リサーチ・アドミニストレーション協議会. 熊本城ホール. 熊本
Issue Date	2025-10-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96183
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/
Type	conference poster
File Information	2025RA_PP1-055.pdf



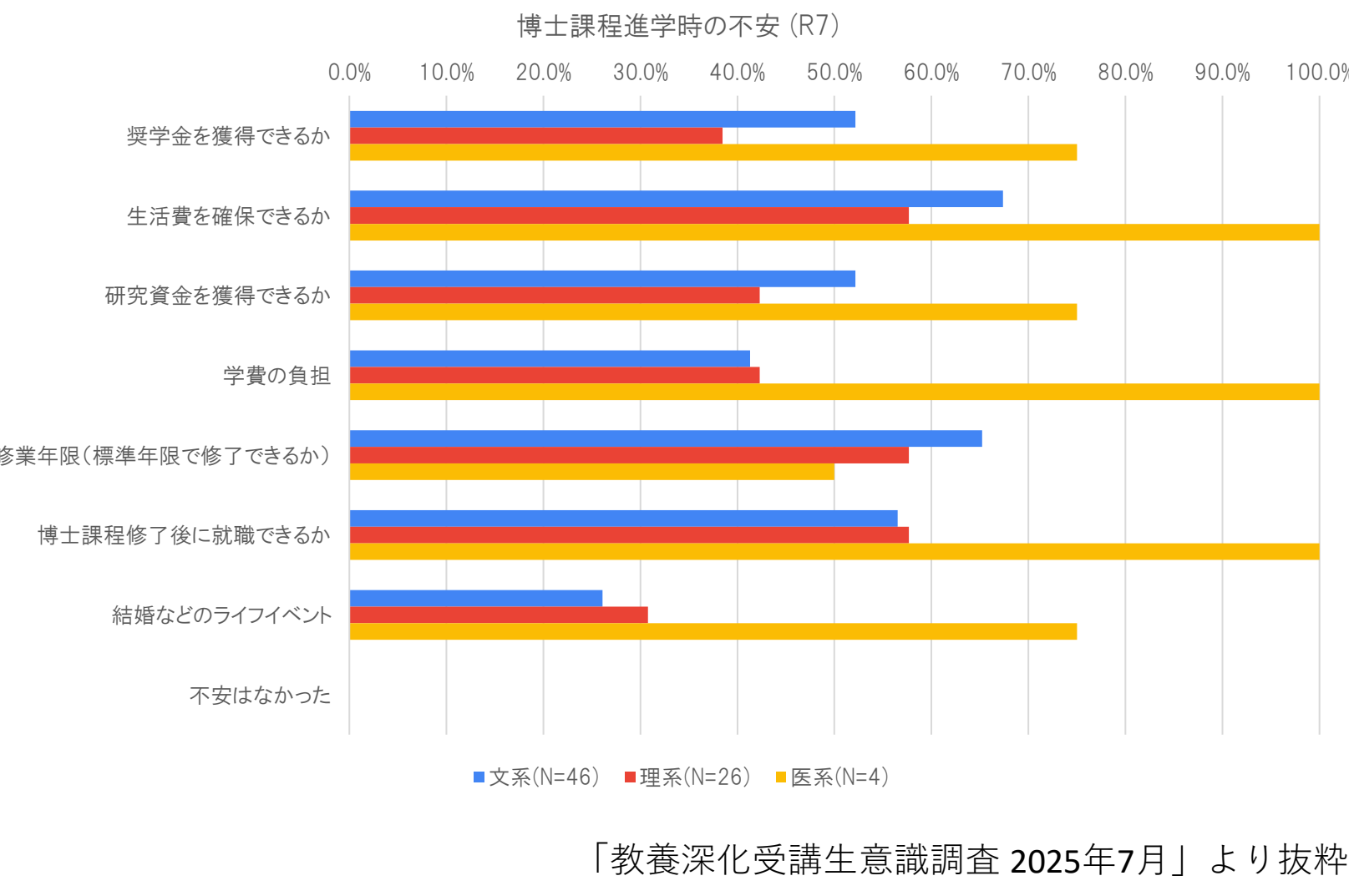
PP1-055 人文・社会科学系大学院生への研究環境向上に資する経済支援

北海道大学大学院文学研究院研究推進室 ○飯塚理恵 澤田真理子 森岡和子 加藤美樹

【概要】北海道大学大学院文学院は、約180名の博士後期課程学生を擁する人文・社会科学分野の研究教育拠点である。博士学生への経済支援3本柱とされる、1. 日本学術振興会特別研究員DC、2. 次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）、3. RA（リサーチアシスタント）のほか、部局独自の旅費・校閲費支援や授業料減免への申請も可能となっている。特に、2021年度に開始したSPRING事業では、これまでに100名を超える文学院生が支援を受けており、博士学生の研究環境は大幅に向上してきた。しかしながら、博士後期課程に進学する学生は修士修了者の25％であり、75％の学生は進学を選択していない。優秀な学生の確保には何が必要か、現場の声をもとに考察する。

1. 背景

北海道大学は、2021年にJST科学技術イノベーション創出に向けた大学院フェローシップ創設事業およびJST次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）に採択され、2025年現在まで継続的に博士後期課程在籍者への経済支援を行ってきた。支援開始から5年目を迎えた今年、文学研究院部局URAが、学生・教員・事務職員にインタビューを行い、博士後期課程学生への支援の現状および課題について報告を行う。



博士課程進学時の不安

左のグラフは、教養深化プログラム※受講生を対象に実施したアンケート結果である。文系学生のうち、博士課程進学時に不安を感じる割合が高いのは、①生活費を確保できるか(67%)、②修業年限(65%)、③博士課程修了後に就職できるか(57%)である。これらの不安軽減に、博士人材フェローシップがどのように役立っているのか知りたいというのが、インタビュー実施の動機である。

※民間企業・公務員・教員などへの就職を希望する全学の修士および博士の学生を対象とする教育プログラム。人文社会科学諸分野の総合的な学修と、ジェネリックスキルの修得により、専門知識を実社会で役立てる実践力の向上を目指す。

大学院文学院博士後期課程学生のフェローシップ採用人数

	事業名	プロジェクト名	生活費(年額)	研究費(年額)	2021	2022	2023	2024	2025	合計
1	JST科学技術イノベーション創出に向けた大学院フェローシップ創設事業 ボトムアップ型	アンビシャス博士人材フェローシップ (SDGs)	180万円	36万円	1	2	4			7
2	JST科学技術イノベーション創出に向けた大学院フェローシップ創設事業 分野指定型(情報・AI)	アンビシャス博士人材フェローシップ (情報・AI)	180万円	36万円	2	4	6			12
3	JST次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING)	Society5.0を牽引するDX博士人材育成のための研究支援プロジェクト (DX)	(2021, 2022) 180万円 (2023) 216万円	40万円 +追加支給	34	42	38			114
4	JST次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING)	ExcellenceとExtensionの融合による未来社会の開拓者育成プログラム (EXEX)	216万円	40万円 +追加支給				59	54	113
				合計	37	48	48	59	54	246

※人数は延べ人数

データで見る北海道大学文学部・大学院文学院

■学生数

学部2～4年生 * 634名、修士課程217名、博士後期課程175名

*1年生は総合教育部所属のため含まず (2025年5月1日現在)

■留学生割合

学部0.8% (5名)、修士課程30% (65名)、博士後期課程40% (70名)

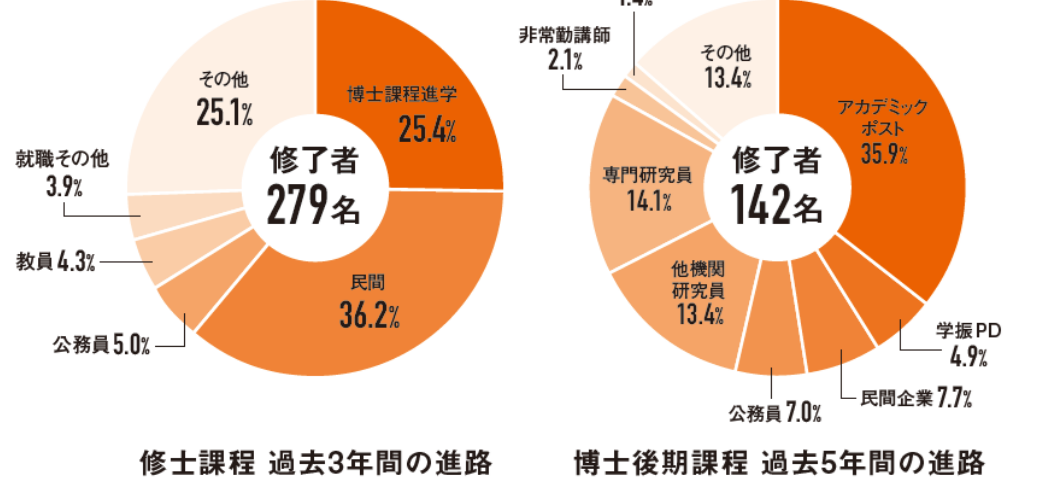
■進学率

学部から修士課程19.1%、修士課程から博士後期課程25.4% (過去3年間の平均)

■修士課程および博士後期課程修了後の進路 (右グラフ)

広報誌『北海道大学大学院文学院2026』より抜粋

📍就職先等詳細はこちら (p43～44)

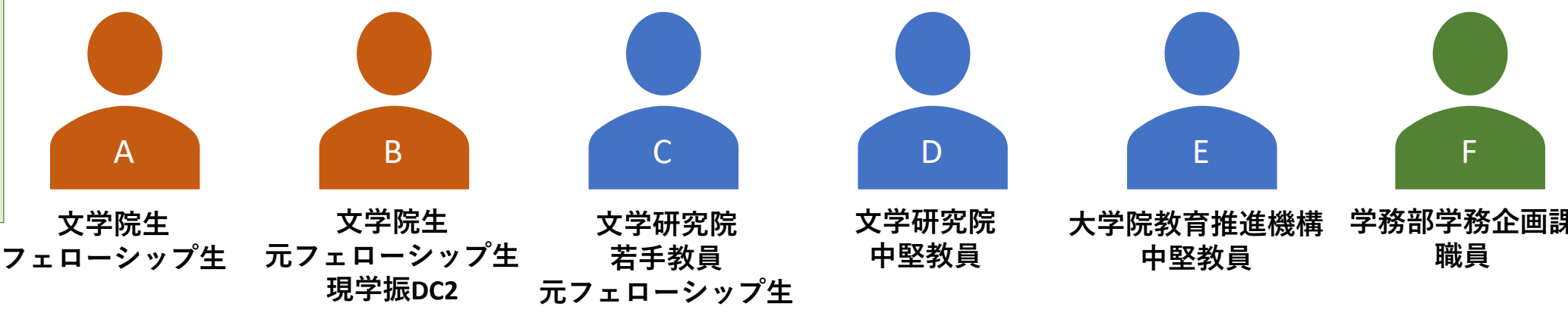


2. インタビュー

時期：2025年9月～10月

方式：1対1の対面インタビュー

対象：文学院博士後期課程学生2名、教員3名、職員1名



Q1. 大学院進学 の 動機

A	学ぶことが好きなので、学部2年生のころから大学院進学を決めていた。
B	高校生のころから大学院進学を決めていた。他大学の学部出身だが、北大の環境が自身の研究内容によりマッチしていると感じ、修士から北大へ。
D	博士進学を検討する際、研究者としての適性、研究の見通し、就職、保護者の理解を得られるか等に悩む学生が多い。

Q2. 文学院生の傾向・強み

D	言語能力やアウトプット能力が高いのが文系博士の強み。
F	文学院生は他学院生に比べてアウトリーチや海外渡航に積極的な傾向がある。

Q3. 標準修業年限

A	博士修了は4年でも早い方だと思う。ある程度の博士論文を書くとなると時間がかかる。自分の周りでも3年で修了する人はあまりいない。
A	どこまで到達していれば博士論文として認められるのかという基準が分かりづらい面がある。
B	修士進学時は不安だったが、指導教員が修士2年、博士3年で修了できる道筋を示してくれた。もし博士は5年かかると言われたら、そういうものだと思っていたかもしれない。
C	フェローシップのおかげでアルバイトを減らすことができ、3年間で博士修了できた。
F	理系学生と比較すると、文系学生は博士修了までに4～5年かかるケースが多い。修了後のキャリアを考えると、標準修業年限内で修了することも重要ではないか。

Q4. フェローシップ の 導入

F	以前は、学生に研究費を渡す場合は研究室を通していた。フェローシップでは学生を一研究者とみなし、直接支払う方針に。数百名規模の大学院生に直接研究費を支払うのは、事務としても初めての経験だった。ワンストップ窓口開設、職員増員、マニュアル作成等に尽力に対応。
---	--

Q5. フェローシップ 経済支援 の 活用

A	フェローシップで生活費まで支援してもらえるのは非常にありがたい。
A	研究費は調査旅費、学会参加、書籍購入に使用。学内助成金も併用し、目的に応じて使い分けている。
B	研究費はほぼ全て旅費に使用。国際学会に積極的に出席し、国際的な研究者コミュニティに参画することで研究を進展させたい。
B	フェローシップで2週間海外大学に滞在。その時築いた関係をアピールし、学振若手研究者海外挑戦プログラムに採択された。半年間の滞在中に得られた成果をもとに執筆した論文が国際誌に掲載。全てつながっている。
B	フェローシップにも組み込まれている学内の教育プログラムで知り合った理系大学院生との共同研究が企業の助成金に採択された。他大学の若手とともにプロジェクト進行中。
B	フェローシップを1年間受給後、学振DC2採用。フェローシップの方が柔軟に研究費を使用でき、新たな試みに挑戦しやすかった。
A	修士在籍時にフェローシップ申請のため博士3年間の研究計画を立てた。進学後、研究内容が変化しただが、報告書で研究内容を報告することで、研究費を受給しながら研究継続できている。
C	フェローシップ採用当初、旅費申請や書籍購入の方法が分からず苦労したが、教員になった今、その経験が活かしている。

Q.6 進路

A	以前はアカデミア1本で考えていたが、進路相談を通して他の分野にも興味がわき、幅広い進路を検討している。
D	文学院の博士進学者はアカデミア志向が強い。初めから企業就職を視野に入れている学生は少ない。
E	文学院の留学生は、日本語が堪能で日本が好きという学生が多いので、日本企業との親和性が高い。
E	人手不足に悩む自治体が、地域連携人材としての文系博士の活躍に期待を寄せている。
E	Advanced COLAや赤い糸会などキャリア関連イベントでは、文系博士採用に関心がある企業の情報提供を行っている。
F	博士人材は、学部や修士の学生と比較すると能力が高い。自分で課題を発見し、仮説を立て、研究を行っているので、企業に入ってもその能力を活かして活躍できると思う。
F	博士修了後10年間の進路追跡調査が必要だが、特に留学生の場合、コンタクトを維持するのが困難なケースがある。

Q.7 今後に向けて

B	フェローシップにより、博士学生への支援はかなり充実してきた。今後は、修士学生への支援を充実させることで、優秀な大学院生を呼び込めるのではないか。
C	修士と博士あわせて5年間のフェローシップがあれば、アカデミア志望の学生が経済的不安を抱えず研究に専念できる。
F	2027年度以降、留学生への生活費支給停止に伴う研究力低下を招かないか懸念している。
F	社会人で収入のある大学院生にも研究費を配分できるようになれば、社会人の大学院進学を後押しできるのではないか。

3. まとめ

博士人材フェローシップの導入により、博士後期課程学生への経済支援が充実し、研究環境は格段に向上した。博士進学時の懸念となっている標準修業年限内修了は、研究分野や個々の認識に左右される側面が大きい。進路に関しては、アカデミアorノンアカデミアという枠組みにとらわれず、自身の能力を活かせる場に身を置きたいという声が聞かれた。博士人材が社会のあらゆる場で活躍する未来を描きながら、きめ細やかな情報提供や進路相談を継続することが重要。フェローシップ制度を最大限に活用するには、在学中3年間の経済支援のみにフォーカスするのではなく、進学前の情報提供、在学中の研究指導、フェローシップ生向けカリキュラム開発、事務手続支援、キャリア支援、修了後の活躍までを念頭に置き、トータルでサポートする長期的な視点が不可欠である。学生、教員、事務職員、URAが各々の立場で力を尽くすことで良い循環が生まれ、次世代を担う人材育成につながる。